

幼児期の感性を育てる I

—幼児期の感動体験と教師の役割—

角 田 富美子

要 約

感性とは、「①外界の刺激に応じて感覚・知覚を生ずる感覚器官の感受性，②感覚によって呼び起こされ，それに支配される体験内容，したがって，感覚に伴う感情や衝動」と定義される。(広辞苑)

一般に幼児期は，日々の生活の中で，直接的・具体的な体験を通して豊かな心情・意欲・態度を培い，成長・発達を促していく。その際，幼児は，新しいこと，珍しいこと，楽しいことなど，様々な場面で「もの」や「こと」に感じて心が動き，表現する。この「感じる力」(感性)は，自然・もの・人とのかかわりの中で培われ，人間の情緒・情操を養い，豊かな人生を築くための大きな力となる。特に幼児期は，出会ったものに心を動かし，五感で表現する。つまり，幼児なりに深く感じて心を動かしているのである。この身近な事象や動植物に対する好奇心や探求心は，やがて，思考力を育み，知識や技能獲得への意欲を育てる。本研究では，幼児期の感動体験の捉えを明らかにし，豊かな感性を育てる指導を探る。

はじめに

1 研究の動機と目的

アリヤダンゴムシを見つけて踏みつぶしたり，チョウチョの孵化を「図鑑で見ても知ってるもん」といって興味を示さない子を見かける。また，かけっこに誘うと「疲れるから」といい，リズム遊びで楽しかったね，というと「こんなのが楽しいの」という声が返ってきた。子どもたちは何に対して，どのように感動するのか。子どもたちの生活から，自然とのかかわりや，体を思いっきり動かす遊びが少なくなり，テレビや，ゲームなど，ハイテク玩具が子どもたちの遊びの空間を占めるようになり，一人で楽しめることが多くなった。幼稚園教育要領には，「豊かな感性や表現する力を養い，創造性を豊かにすること」，「身近な事象や動植物に対する感動を伝えあい，共感し合う事の大切さ」が示されている。

幼児は自分で何かを発見したり，気づいたりしたことをまずそばにいる友だちや保

育者に伝える。そして、それに対する相手の応答によってさらに気づきや共感が広がっていく。私たちは、このように幼児が出会ったものを感じたり、気づいたりしたことを言葉や表情や動きで表現したとき、物に感じて心を動かした、つまり「感動した」と捉えている。戸梶（2001）によると、「幼児の感動表現は五感に訴える身体感覚が感動を媒介・増幅している」。早坂（1981）は、「感動したときには、強い感情の動きが生じている」。さらに、A.アドラー（1927）は、「他者と結びつける情動として、「喜び」・「同情」が共同体感覚に対する最も純粋な表現である」と捉えている。さらに、福田（2010）は、「原始情動・基本情動・社会的感情・知的感情」が同時に協同して働くことが「感動」と捉えている。これらの先行研究をふまえて感性の原型ともいわれる幼児期の感動体験が感性の育ちにどのように影響しているかを探りたいと考えた。戸梶（1999）は「感動は感情を生じる中で喚起されており、感動に含まれる感情は、喜び、悲しみ、驚き、尊敬の順である」というが、専門の保育者によるパイロットスタディを踏み台として、幼児の感動表現から心の動きを見ると、「喜び、発見、気づき、驚き、達成感、尊敬、共感」等の快感情が、喜びを伴った感覚器官に感動として表出していると考えられた。したがって、ここでいう感動とは、保育の実践をふまえて、快感情によって表出された心の動きに限定して定義づけた。最近では、環境の変化による実体験の不足から発見や気づきが乏しくなり人間関係も稀薄になったといわれる。つまり、感性とは、自然やもの、人とのかかわりの中で気づき、磨かれ、培われていくものと考ええる。そこで、本研究を通して、幼児の感動の伝え合い、共感し合う姿を捉えることによって、幼児の感性を育てる教師の指導の在り方を考察する。

2 研究の方法

1. 「予備調査」

①専門の保育者10名によるパイロットスタディを2002年10月に実施し、②東京・千葉の幼稚園・保育園に在職する保育者50名と保育者養成大学2年に在籍する学生67名に記述式、自作質問紙で自由回答式によるアンケートを2002年11月に実施した。

①の予備調査については、38の項目の感動表現から心の動きを検討した結果、「喜び、発見、気づき、驚き、達成感、尊敬、共感」などの快感情が、喜びをともなった感動と考えられた。以下はその内容の一部である。

- | | |
|---------------------------------|------|
| ・チューリップの花をみて、きれいなねーとそばにいる友だちに言う | （驚き） |
| ・「先生、花が咲いたよ」と指をさして教師に伝える | （発見） |
| ・花を見て「チューリップ」の歌を歌う | （喜び） |
| ・「いいにおい」といって花のにおいをかぐ | （発見） |
| ・「あっちも、こっちも、たくさん咲いているね」といって指をさす | （発見） |

②の予備調査については、63名の学生からは、幼児期の体験で今でも印象に残っている感動場面、保育者からは、子どもたちの感動表現の姿がそのままに記述式で回答が得られた。その結果、317項目の感動の様態がみられたので、ベレルソンの内容分析を参考に KJ 法により16のカテゴリーと48項目に分類した。以下はその内容である。

何に対しての感動か (KJ 法による分類)

	カテゴリー	項目
身近かな自然とのかかわりから	① 植物の成長に対する感動	① 花が咲く ② 収穫 ③ 実のなる物や葉っぱの変化
	② 身近な小動物に対する感動	④ 身近な小動物との出会い ⑤ 動きやしぐさ ⑥ 触れたり抱いたりした感触
	③ 自然の大きさ偉大さに対する感動	⑦ 自然の大きさ ⑧ 自然の力 ⑨ 自然の不思議さ
	④ 自然の美しさに対する感動	⑩ 自然の美しさ ⑪ 自然の声や音 ⑫ 偶然の色や形
	⑤ 自然の現象に対する感動	⑬ 自然の感触 ⑭ 自然の変化 ⑮ 事前の不思議さ
	⑥ 自然物の発見に対する感動	⑯ 自然物との出会い ⑰ 自然物の味覚 ⑱ 自然物の生体の違い
	⑦ 身近な虫や昆虫に対する感動	⑲ 身近な虫の発見 ⑳ 昆虫の感触 ㉑ 昆虫の成長
	⑧ 自然物を何かに喩えた感動	㉒ 自然物でのあそび ㉓ 自然物での利用 ㉔ 自然物を使っての工夫
遊びの中で	⑨ 課題の達成に対する感動	㉕ 繰り返しの挑戦 ㉖ 考えたり工夫したり ㉗ 思い通りに発表
	⑩ 自分の行動を友だちが評価してくれたことに対する感動	㉘ 友達や教師にほめられた ㉙ 頑張りが認められた ㉚ 自分の行為が伝わった
	⑪ 遊びのなかでの発見に対する感動	㉛ 思わず体が動く ㉜ 放心状態 ㉝ いろいろの物ができた
	⑫ 友だちの作品に対する感動	㉞ 友達の作品のすばらしさ ㉟ 頑張って取り組む友達 ㊱ 友達のおおらかさ
グループで取り組む活動の中で	⑬ 友だちとの共同活動に対する感動	㊲ 共に参加した喜び ㊳ 友達と共感 ㊴ 友達と感情の共有
	⑭ 友だちのよさの気づきに対する感動	㊵ 友達の手助け ㊶ 友達の優しさ ㊷ 友達が祝ってくれた
	⑮ 友達が何かを達成した事に対する感動	㊸ 出来なかったことが出来るようになった ㊹ 応援したり、助けられた ㊺ 行事と一緒に参加
その他	⑯ いつもと違うものに出会えたことに対する感動	㊻ 奇麗に飾られている ㊼ 工夫された美しさ ㊽ 父親や祖母が遊んでくれた

ここでは、幼児期にどのような場面で、どのような事がらに感動したかを捉える。そのために、16項目のカテゴリーと48のアンケート項目を作成した。アンケートは、5件法によって感動の度合いを調査した。

2. 「本調査」

①記述式アンケート結果をKJ法により分類し、調査用紙を作成した。②幼児期の感動体験尺度の作成のために、東京・千葉の保育者養成大学の学生200名（2年生）にアンケート調査を2003年1月に実施した。③2004年2月、保育者の感動表現の捉えを明らかにするために、東京・名古屋・広島・沖縄の保育者350名を対象にアンケートを実施した。

3. 「観察」

調査で得られた感動体験尺度をもとに、都内公立幼稚園の5歳児を観察し、幼児の感動表現場面を自然観察法によって捉えた。

第1章 幼児期の感動因子の抽出と感動体験尺度の作成

1. 感動因子の抽出

予備調査で作成された16のカテゴリー・48項目の感動表現を因子分析によって感動体験尺度を作成した。①KJ法によって分類した16のカテゴリー・48項目を5件法尺度によるアンケート項目に作成し、2003年1月、東京・千葉の保育者養成大学の学生200名（2年生）に調査を実施した。アンケート項目については、学生の幼い頃（幼児期）に自分で何かを発見したときや、気付いたりして感動した体験について思い出すままに5件法尺度（度々あった・たまにあった・何とも云えない・あまりなかった・全くなかった）によって回答を得た。有効回答は183名（回収率93%）であった。

2. 感動体験尺度の作成

幼児期の感動表現の構造を明らかにするため、得られた183名の回答に基づき因子分析（主成分分解、プロマックス回転）を行い、幼児期の感動体験尺度を作成した。相関行列の主対角要素に全て、1.00を用いて、主軸法によって因子を抽出した後に、プロマックス法によって、因子軸の回転を行った。はじめ、固有値1以上の因子を抽出した結果、15因子が抽出されたが、解釈が困難であり5因子構造が妥当と判断した。

最後に各下位尺度の信頼性を α 係数を算出して確認した。第1因子は $\alpha=0.90$ 第2因子は.87第3因子は0.87第4因子は0.83第5因子は0.72で、第5因子が若干落ちるが満足すべき値と云える。

〈学生による幼児期の感動体験尺度〉

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
〈第1因子 11項目 $\alpha=.90$ 〉						
20 昆虫の動きやぬくもり	0.858	-0.164	-0.081	0.160	-0.031	0.668
16 せみやザリガニの脱皮	0.829	-0.125	0.108	-0.053	-0.029	0.603
21 飼育したり、幼虫になったり	0.796	-0.096	0.078	0.105	-0.102	0.634
19 ダンゴムシや虫の卵	0.735	-0.038	-0.156	0.069	0.097	0.554
6 触れたり抱いたり	0.727	0.219	0.077	-0.292	-0.096	0.548
13 水の冷たさ泥のぬるぬる	0.615	0.049	-0.103	0.007	0.125	0.437
4 小動物との出会い	0.547	0.132	0.209	0.054	-0.117	0.538
5 小動物の動きやしぐさ	0.429	0.372	0.062	-0.102	-0.015	0.467
23 自然物の利用	0.393	-0.013	0.073	0.365	-0.184	0.404
24 自然物を使って遊ぶ	0.376	0.008	-0.052	0.171	0.092	0.278
15 雪が積もる、水溜り	0.324	0.170	-0.135	0.156	0.257	0.412
〈第2因子 11項目 $\alpha=.87$ 〉						
10 空の月や星	-0.225	0.811	0.143	0.092	-0.156	0.594
7 夕日や星空	-0.259	0.799	0.154	0.133	-0.178	0.587
1 花が咲く	-0.046	0.737	-0.155	-0.004	0.111	0.503
3 葉っぱが色づく	0.087	0.709	-0.178	0.057	-0.039	0.498
8 台風や水の流れ	0.164	0.594	-0.020	-0.141	0.115	0.456
9 自然の不思議さ	0.035	0.484	0.125	-0.129	0.127	0.318
11 小鳥の声や風の音	0.134	0.445	-0.057	0.287	-0.042	0.448
14 葉っぱの色が変わる	0.053	0.445	-0.154	0.434	0.059	0.562
2 収穫のとき	0.254	0.428	0.004	-0.259	0.096	0.295
12 シャボン玉や花火	0.112	0.386	0.139	-0.054	0.154	0.352
18 動物の生態の違い	0.209	0.297	-0.065	0.257	-0.120	0.294
〈第3因子 9項目 $\alpha=.87$ 〉						
42 お祝いしてくれる	-0.036	-0.051	0.711	0.100	-0.098	0.488
36 友達の親切	0.033	-0.007	0.705	-0.121	0.149	0.489
41 友達がそばにいてくれる	-0.079	0.031	0.692	-0.044	0.147	0.507
40 友達が貸してくれた	-0.047	-0.081	0.625	0.005	0.143	0.438
37 友達と一緒に作って満足	0.143	0.078	0.537	0.087	-0.046	0.471
44 頑張ったりやり遂げる、応援	-0.011	0.013	0.444	0.213	0.266	0.582
30 行為が変わった	0.118	-0.047	0.438	0.411	-0.134	0.553
38 面白い発想に共感	0.154	0.081	0.336	0.018	0.185	0.368
39 友達とわくわくどきどき	-0.064	0.139	0.335	-0.001	0.258	0.330
〈第4因子 9項目 $\alpha=.83$ 〉						
27 発表会	-0.129	-0.004	-0.029	0.640	0.201	0.421
26 泥ダンゴへの工夫	0.050	-0.048	-0.071	0.620	0.270	0.496
25 縄跳び、鉄棒への挑戦	0.147	0.028	-0.066	0.565	-0.050	0.385
35 最後まで頑張ったり取り組んだ	0.001	-0.006	0.210	0.494	0.109	0.493
33 いろいろな素材で遊ぶ	0.150	-0.090	0.107	0.483	0.165	0.483
29 頑張ったことを認めてもらった	-0.006	-0.022	0.364	0.481	-0.195	0.463
28 作品を誉められた	-0.025	0.023	0.246	0.411	-0.086	0.301
43 出来るようになったこと	-0.002	0.032	0.163	0.337	0.154	0.307
34 作品を見て感動	-0.114	-0.092	0.147	0.320	0.234	0.247
〈第5因子 5項目 $\alpha=.72$ 〉						
46 きれいに飾られている	-0.029	0.049	-0.017	0.145	0.618	0.503
31 好きな曲を聴いたりテレビ	-0.019	-0.135	0.115	-0.058	0.585	0.296
47 工夫された美しさ	-0.092	0.128	0.039	0.087	0.502	0.364
45 一緒に参加	0.063	0.032	0.255	0.065	0.383	0.404
32 食い入るように見る	0.153	0.018	0.086	0.100	0.328	0.288
*木の実や花の蜜						
*雪だるまや自然物で遊ぶ						
*父親との遊び						
累積寄与率 (%)	30.38	37.91	43.20	47.17	50.68	

*のついている項目は、IT 相関と α 係数を求めて項目を選定した結果、削除された項目である。

3. 結果の考察

第1因子 ($\alpha=.90$) は、小動物に触れたり抱いたりして感じたぬくもりや、小動物の生態、飼育している小動物の動きやしぐさにであって感動していることから「小動物との出会い」と命名した。このことは、小動物とのかかわりが少なくなった環境とのかかわりの中で、生き物の肌に触れたり、思いもしなかった動きをもっていることに驚き・発見が、時には自己との共感による心の動きが強烈に印象化され、感動体験となっていると思われた。

第2因子 ($\alpha=.87$) は、自然の不思議さ、偉大さへの驚き、発見など、動くモノではないが、日常的に変化している、そのモノに対する気づきや発見に感動していることから「自然の不思議さへの気づき」と命名した。このことは、忙しい日々の中で、自分はいま、どのようなことに感動しているか、幼い頃はどのような日々であったか、を思い出しながら幼い頃に見た自然の美しさ、父や母および周囲の人々の姿を通して感じた喜び、友だちとの共感によって得られた嬉しさの情景が心に残っているものと思われる。

第3因子 ($\alpha=.87$) は、友達が祝ってくれた。親切にしてくれた、一緒に協力してくれた等、友達に対する尊敬や、喜びに感動していることから、「友達との共感」と命名した。

ここでは、懐かしい友達と共いた喜びや充実感、友達の欲求に答えることができた嬉しさ、寂しさを共有してくれた友達への尊敬や同情など、友達のよさが今も心に残っているものと思われた。このことは、推測として、現在の自分の友達観に影響しているのではないかと考えられる。友達との共感が、動物や自然よりも下位になっているということは、若い人たちの人間関係を反映しているのではないとも思われる。

第4因子 ($\alpha=.83$) は、発表会で頑張って満足した、物づくりに工夫や、挑戦、最後まで頑張って取り組んだ充実などから、「課題の達成」と命名した。

ここでは、目的をもって取り組んだ課題の困難を克服したり、最後まで頑張って仕上げた満足感、充実感、さらに、友達と協力して役割を果たした達成感が原体験として心に残っているものと思われるが、結果として、教師や父母など、周りの人々から賞賛されたことも大きな感動体験となっていると思われる。しかし、4番目となっているのは、必ずしも褒められたことや、認められたことが、感動としての体験にはなっていない面もあると思われる。

第5因子 ($\alpha=.72$) は、きれいに飾られている状況や、テレビのアニメ、絵本など、さまざまな情報によってもたらされる空想、憧れに対する感動から、「美しい物への憧れ」と命名した。美しい物に対する驚きや喜びは常に幼児の心を動かす。しかし、次々にもたらされる情報によって驚きや発見も変化していく。特に、物語や、空想の世界へのあこがれは、現実の生活によって印象化されにくいと思われる。しか

し、忘れられていても、原体験として、何かのきっかけで感動体験がよみがえってとも考えられるので、心に残る美しさは、幼児期にとって大切なものであると思われる。

第Ⅱ章 幼児期の感動の表れと人とのかかわり

1. 目的と方法

本調査で得られた感動体験尺度、5つのカテゴリーの感動場面で表現の方法を観察し、感動の伝えあいについてエピソードとしてまとめ、幼児の姿を通して感動の表れを探り、学生の感動体験を実証した。①観察対象児は東京・公立幼稚園の5歳児35名②観察場所はF幼稚園の保育室・園庭③観察時期は2003年5月～10月6ヶ月間延計14回④観察時間は午前9時（登園）～2時（降園）⑤観察方法は自然観察法により行動描写による自由記述。

その結果、幼児の感動表現の方法を見てみると、伝えたい対象へのかかわりに、言葉や表情や、しぐさ、身振りなど五感を使って表現している。特に友達に働きかけている姿のなかから感動の様態を探ると同時に、対人関係のなかでの関わりを観察した。

2. 感動の伝えあい

調査1で得られた感動体験尺度、5つのカテゴリーである小動物との出会い、自然の不思議さへの気づき、友達との共感、課題の達成、美しいものへの憧れの感動場面で、どのように表現しているかを観察し、そのきっかけ、表現の方法、応えてくれる友だち、の観点で分析し、表にまとめた。

「小動物との出会い」では、①カブトムシの幼虫もいるよ（5月）②ウサギってかわいいね（9月）「自然の不思議さへの気づき」では、①ミックスジュースできたよ（6月）②いもほり遠足ってたのしいね（10月）「友だちとの共感」では、①ウサギのウンチいっぱいあるね（5月）②運動会の練習しよう（9月）③バドミントンキャッチ（9月）「課題の達成」では、①よくとぶ飛行機つくれるよ（6月）②水族館ごっこやろう（6月）③パレードの練習をしよう（9月）「美しいものへの憧れ」では、①6歳の誕生日おめでとう（7月）の事例を感動のとらえとかかわりの視点について分析した中からそれぞれ1つのエピソードを次に示した。

〈感動の伝えあいの事例（エピソード）〉

(1) 「小動物との出会い」①

カブト虫の幼虫もいるよ（5月）

きっかけ	表現の方法 ----- 応えてくれる友達	感動の捉え	かかわりの視点
だんごむし探してたくさん の団子虫を集めて いるS夫	団子虫を砂場のバケツに入れてみている	生き物の生態に対する関心	興味をもつことでかかわるきっかけをつくる
	「いいよ・カブト虫の幼虫もいるよ」といって、箱の中をかき混ぜている。	生き物の感触に対する驚き	
	「これはでかいんだよ」と大きいカブト虫の幼虫を手で触り「あったかい」といっている	生き物の感触への気づき	模倣することで相手と同じ感情を共有
	幼虫が土にもぐるのを見て「穴もほるんだよ」といいながら2人に見せている	生き物の生態に対する発見	
	Sは「ありがとう」とそばを離れていくYに大きな声でいう	友達の親切さへの気づき	友だちの優しさへの応え
	Sはだまっている		
	Sは「なにたべるかなー」といいながら姫リングを幼虫に触らせると体を丸めて茎をつかんだようになったのを見て「これ食べるんだ」という	生き物の動きやしぐさに対する気づき	表情やしぐさの模倣による感情の共有
	Sは滑り台の上から姫リングをとり、Cにむかって「おとすよー」といい、おとす。	生き物への関心好奇心	模倣による確かめと発見の喜びを共有
	「なに？変な虫？」といいながらMに手をつながれ庭の隅に走っていく	友達に頼られる嬉しさ	団子虫をめぐる仲間としてのつながり
	「暗いところにいるんだよ」といいながら草をかき分けて探している「幼虫みつけました」と大きな声で云う	生き物の発見に対する喜び	友だちの期待に応えた自信
	「幼虫見る人手を挙げて」といいながら、箱のところに戻り、「かんでるかんでる」といって、嬉しそうに幼虫と姫リングをみている	生き物の発見への期待	
	Sがきて「この中に幼虫がいるんだよ」といいながら掘っている。	生き物への好奇心と発見に対する喜び	友だちの期待に対する信頼
観察と考察	相手の表情やしぐさによる模倣で得られる共感が相手と同じ感情を共有することによって得られる親しさや安心感ももっている。さらに、団子虫をめぐる発見や、気づきが直接的に連合を組み、仲間としてのかかわりが生まれてきている。		

(2) 「自然の不思議さへの気づき」①

ミックスジュースできたよ (6月)

きっかけ	表現の方法	応えてくれる友達	感動の捉え	かかわりの視点
<p>園庭のテーブルで、T子とY子が色紙で色水づくりをしている</p> <p>「いろみず」とTがいう。</p> <p>Tが「葉っぱでもいろみずできるよ」という。Mは黙々と色紙の色水づくりをしている</p> <p>ジュースづくりをしているTとYはいろみずをままごと用のしゃもじでかき混ぜている</p> <p>Tがいなくなるが、しばらくするとすりこぎを2本持って戻ってくる。</p> <p>2人は杏のジュースづくりをみて顔を見合わせて笑い、すりこぎで葉っぱをすっている。</p> <p>「ジュースができました」といって、プラスチックの容器に次々にいれている。</p> <p>Tは「ちょうだい」といってうけとり、すりこぎで姫リンゴをすりおろしている。</p> <p>まわりには子どもたちは柿の木の下に落ちている青い小さな柿と姫リンゴ、杏の実などを拾い集めてジュースづくりに発展していった。</p>	<p>TとYが園庭のテーブルに紙テープとハサミをおいて、水を入れた容器に黄色のテープを細かく切っていれ、手でかき混ぜている。</p> <p>水がだんだん黄色になってくるのを見ながら顔を見合わせている。</p> <p>「なにやってんの」と、水槽を持って通りかかったUが開く</p> <p>Uが持っていた緑の葉っぱをさしだすと</p> <p>UとA。Kはテントウム虫探しの途中で杏の水の下に落ちていた杏の実を2個ひろって、「梅だ」といっている。</p> <p>そばのベンチに腰掛けて、ダイコンおろして、Kが杏の実をすり下ろしている。</p> <p>Aは両手で容器を押しさえている。Cが近づいてのぞき込むと「見せてあげようか」といっている。</p> <p>一つがすりおわると匂って「梅ジュースだ」といっている。</p> <p>教師が来て「なにができたの」というと「梅ジュース」という「甘い匂いがするね。杏みたいね」というと、2人は「梅と杏のミックスジュース」といってもう一つの杏をすり下ろしている。</p> <p>ジャングルジムに上っていた男子3人が姫リンゴをとり、手にいっぱい持ってきて「青トマトがこんなにあったよすごいだろ」といって、AとKにみせる。</p> <p>Kがそれをうけとり、「青トマトもジュースに入れよう」といって姫リンゴをすり下ろしている。</p> <p>Uが姫リンゴをもってきて、これでジュース出来るよと言う。</p> <p>姫リンゴのなかに柿をみつけたUは「柿の赤ちゃんだ」と大きな声で叫んでいる。</p>	<p>色紙から色が出ることへの不思議さを試す試みから期待通りの結果への喜び</p> <p>梅ににている杏が思いがけず幼稚園の庭で見つけることができたことへの驚き</p> <p>友達のジュースづくりからの刺激によるジュースの作り方への気づき</p> <p>杏を搾ることで甘い匂いのするジュースができたことへの驚き・喜び</p> <p>姫リンゴもジュースにできると確信をした試しや工夫の喜び</p> <p>身近なところにあるはっぱや草でジュースができることを発見した嬉しさ</p> <p>思いが実現したことへの満足感・嬉しさ</p> <p>偶然的発見による驚き</p>	<p>色水に興味もち仲間入りのきっかけを作っている</p> <p>模倣による確かめと発見の共有</p> <p>共同で遊びをすることへの感情の共有と連帯感</p> <p>同じ場で別々のことをしながら刺激のしあい</p> <p>興味をもった友達が遊びの面白さを共有</p> <p>友達の経験から知り得たことを伝え、関係づくり</p> <p>友達の遊びから刺激を受けた仲間意識の発展</p>	
観察と考察	<p>先行経験を生かした色紙による色水づくりが、自然物の発見によって互いに刺激しあい、思いを実現するための試しや工夫によって自然物を使ったあそびの面白さが伝わっている。身近な自然に対する発見や気づきが、それを使って遊ぶことの楽しさを引き出し、仲間としてのつながりが広がってきている。</p>			

(3)「友だちとの共感」①

ウサギのうんちいっぱいあるね (5月)

きっかけ	表現の方法	応えてくれる友達	感動の捉え	かかわりの視点
ウサギ小屋の清掃を担当のS・K・Hの3人でしている	Sはうさぎの当番をしている 「うさぎのうんちあふれてるじゃん」といいながら、糞を新聞紙の中にもめている 糞の入った新聞紙をごみ箱に入れてから、ウサギのゲージに指を入れて、ウサギが指に飛びつくのをみている。 ウサギが指に飛びつきそうになると、別のところに指を入れている。	そばで、TとHがへらで糞を集めている。 「こんなのでっけいうんち」といってHにみせている	生き物の生態に対する発見	共同で作業する仲間の確認
	Tは「こんなちっちゃなうんちもあるよ、へんだよねー」といいながら、へらにいれてはごみ箱にいれている	ゲージの底がきれいになったのを見てSとHが「下について洗ってくる」といってウサギのゲージをもって洗い場に行く	生き物の生態に対する気付き	言語を媒介とした感情の共有
	Tは糞をごみ箱に入れてから、ウサギのゲージに指を入れてウサギをなでている	2人が洗ったゲージの底をもつとくと	生き物の感触やぬくもりの心地よさへの嬉しさ	
	Tは「大変だよなー」といいながら顔を見合わせて笑っている	3人で笑いながらSとHは雑巾で箱の水をふきとり新聞紙をしく	生き物の生態への驚き	共同で作業する仲間としての共感
	Tは2人からゲージの底を受け取り、すのこの上の新聞紙をみて、「きちんとしていない」といいながら何度も何度も敷きなおしている。			
	Tは2人の様子を見ながら「これぐらいでもいいよ」といいながら新聞紙をしている。	えさを餌箱にいれていたSとHはTの声にスプーンをおいてTの行動をみている	生き物を飼育することの意味・達成感	お互いの役割の認識
	Tは、ゲージにウサギを入れようとして触るがウサギが逃げるので追いかける			
	Tがゲージの入り口をウサギに向けているがうさぎが逃げる	SとHも一緒になって追いかけている ウサギが素早く、大きいためになかなか掴まらない。		
	追いかけて、触り、押さえるがつかまえることができない。逃げるたびに「あーびっくりした」と大きい声で驚いている	2人は笑いながらだまってみている	ウサギの生態に対する驚き	みんなで協力することの大切がわかる
	おしりを押さえてはウサギが逃げるので、耳をつかまえるが、うさぎは素早く逃げる	HとSもろうかを走るウサギを追いかけているがつかまえることができない		
	Tがウサギの傍にゲージを向け、ゲージの入り口からウサギが入ったのを見て「はいった」「大成功」と口々に云っている	HとSもそばにいて笑っている	生き物の扱いの大変さへの共感	
	Tは「全員完了」と大きな声でいう	HとSは園庭に出ていく	全員で取り組んだ喜び	共同の作業をすることのでつながりが深まる
観察と考察	お当番という共同で作業する中で、互いの置かれた状況の認識と、生き物の生態の発見や言葉を媒介とした感情の共有が、仲間としての直接的なつながりとなり、互いに相手の気持ちに共感している。			

(4) 「課題の達成」①

よく飛ぶ飛行機作れるよ (6月)

きっかけ	表現の方法	応えてくれる友達	感動の捉え	かかわりの視点
Iがよく飛ぶ飛行機が作れるようになったとTに云うとTがテーブルと折り紙を用意してくれた	Iが折り紙で飛行機を作って教師にわたすと教師がとばした。	「ばくもつくって」「わたしもつくって」といって4人が集まってくる。	課題が達成できた喜び 飛行機を作る友達への憧れ・尊敬	相手の喜びや相手の優しさによる親しみ
	「いいよ」といってIは折り紙で飛行機を作っている。	そばで、4人の子どもが見ている。		
	「はい」といって作った飛行機を見ていたMにわたす。	Mは「有難う」と嬉しそうに受け取る	上手に作る友達への尊敬	友達によって要求が満たされた嬉しさが相手への親しみとなっている
	Iは「いいよ」といい、すぐにピンクの折り紙で作りはじめる	「ばくもつくって」「わたしもつくって」とY.M.がいう Yはそばを通りがかった教師に「作ってもらってるの」と嬉しそうにいう	作った飛行機が認められた喜び	
	出来上がるとYにわたす。	Yは作ってもらった飛行機を一回飛ばし、Tに見せに行く		友達のよさを実感
	青の折り紙で黙って作り始める	Y.J.K.M.が「どうして作るの」と、作り方を聞いている	友達への尊敬	
	Iは「できたよ、できたよ」といって、Uにわたす	Uが「ありがとう」といって飛行機を受け取り飛ばし始める	友達への感謝や嬉しさ	飛行機を媒介とした仲間意識
	Iは次々に飛行機を作っている	Y.U.M.は教師が出したプラスチックのボックス積み木の穴を通して飛行機飛ばしの競争を始めている	友達が認めてくれる嬉しさ	飛行機を媒介とした仲間意識・遊びの愉しさ
	傍にいた全員に飛行機を渡してからIも仲間に加わる	飛ばす位置を口々に決めて1列になって飛ばしている	飛行機の飛ばし方の工夫による達成感	友達と一緒に遊ぶ楽しさの共有
	Iは「びしょー」といっては飛ばし、走って取りに行くことをくり返す	箱を一段高くして箱の上ののって飛ばすとよく飛ぶので、次々に箱ののって飛ばしている		
	傍で見ていた記録者に、「よく飛ぶよ、貸してあげようか」と持ってくる	「僕のもよく飛ぶよ」とそばにいたMが云う。	上手にできた飛行機が認められ、みんなで楽しく遊べる満足感・嬉しさ	みんなと同じ行動をすることで仲間意識が高まり、言葉や動きによる共感
	「競争だ」とIがいい、Mととばしあいが始まる。	飛行機とばしは12人になり羽を折ったり、羽を高くしたり、先端を折ったりしながら飛ばし方を工夫している。	考えたり、工夫することでより楽しく遊ぶことができる喜び	
	「サンダーバードごっこだ」といって、みんなと夢中でとばしあいをしている。	「この飛行機かっこいいでしょ」「俺のはサンダーバードだ」「すごいところにとんだよー」と口々に傍にいる友達に云っている 「合体しよう」といい、友達の飛行機を重ねて飛ばしている子もいる。	目標を持って挑戦したり、競争する楽しさ	一緒に遊ぶ仲間としてのつながり、満足感
	観察と考察	Iは、「よく飛ぶ飛行機が作れるようになったからおしえてあげる」と教師に伝えたことから、僕も、私もと要求が高まり、その要求が満たされ、言葉による共感が、やがて飛行機を通した友達への憧れや、尊敬の感情が芽生え、仲間意識が広がっていった。		

(5) 「美しい物へのあこがれ」①

6歳の誕生日おめでとう (7月)

きっかけ	表現の方法	応えてくれる友達	感動の捉え	かかわりの視点		
昼食後の誕生会準備で保育室に舞台ができています	R子がひとりで音楽のテープをかけ、おどりの練習をしている。	Mが足にキラキラした足輪の飾りをつけて、「仲間に入れてー」という	軽快なリズムへの共感	模倣することで相手と同じ感情を共有		
	Rはおどりながら「いいよ」という「お魚天国」といいながらリズムに合わせて両手、両足を動かしている	Mは「うまいね」といってまわっている	上手な演技への賞賛・尊敬			
	曲が終わってもMといっしょにおどっている。	両手、両足にキラキラをつけたNがテープをいれて一緒におどりだす	リズムカルな音楽への共感			
	夢中になって歌いながら踊っている	教師とTが舞台の前の椅子に座り、すずをならしている。	共にリズムに乗る喜び・開放感			
	キラキラした棒を3本とり、Mに1本わたし、Rは2本を両手をもって振っている。Nに1本を渡し、3人で歌にあわせて踊っている		表現する楽しさ		友達と共に表現する楽しさ	
	曲の途中でRがピンクのリボンにもちかえる	Mも水色のリボンを持ち、2人で自由におどっている	互いに表現しあえる喜び		一緒に表現することで仲間意識が強まる	
	曲が終わると両手をあげてフィナーレの様な格好をし、2人顔を見合わせて笑っている「これでいいね」という	Mは「うん」とうなずきリボンをかたづけている				
	そろそろおかたづけの声誕生会の始まり、U子が舞台上に座っている	Rは誕生のお祝いのバッジをつけているUをみて「おめでとう」という	Uは嬉しそうに「ありがとう」というと、座っていた友達が口々に「おめでとう」という		友達を祝う喜び	友達と共に喜び合える気持ちよさ、互いの存在感
		AがUに冠をかぶせながら「よかったね、6さいだね」という	「私はもう6さいになった」「ぼくはまだ5さい」と口々にいう		成長の喜び	
	お祝いRちゃんとMちゃんが踊りをプレゼントしますという教師	RとMは両手、両足にキラキラした飾りを付け、片手にキラキラ棒をもってリズムにあわせておどっている。			きれいに飾る喜びと注目される嬉しさ	友達に認められる存在感
RとMは嬉しそうに一礼をして席に戻る		誕生のUも見えていたクラスの友達も「上手」といって拍手をする	友達に認められる嬉しさ満足感			
		Uは、「RちゃんとMちゃんがお祝いしてくれた」と教師に嬉しそうに伝えている。	自分に対する友達のやさしさへの気づき	友達のよさがわかり、関係が深まる		
みんなで「ハッピーバースデー」の歌を歌い「Uちゃんおめでとう」という		Uはここにこしながら「ありがとう」と答えている	友達を祝う喜び	成長の節目への理解と友達がいることへの喜び		
観察と考察	お誕生の友達を祝うためにリズムの練習をしたり、自分の誕生会のために飾り付けてくれたことがわかり、いい気持ちになると同時に、「6歳だね」といって、お祝いのバッジやダンスなど、成長の喜びと共に、友達のよさに気づいている。					

3. 結果の考察

①伝えあいの事例から

エピソード1「小動物との出会い」では、相手の表情やしぐさによる模倣で得られる共感が相手と同じ感情を共有することによって得られる親しさや安心感が得られる。さらに、団子虫をめぐる発見や、生き物に対するぬくもりが互いの喜びの感情を引き起こし、仲間としてのかかわりが生まれてきている。さらに、兎と触れあうことへの愛着と優しさ、特に、怪我をしている兎に感情移入することから生き物の生態や小動物への思いやりが仲間に自然に伝わりあい、互いの思いが分かり合える関係に育ってきている。

エピソード2「自然の不思議さへの気づき」では、梅の実や、杏の実からジュースを作ったり、姫リングをすりおろしてミックスジュースを作るなど、身近な草や木の実が遊び方によって色々に変化していくことに驚ろいたり、気づいたりする感動を、共に体験して、友達との共感による嬉しさが仲間関係を豊かにしている。さらに、芋掘りでは、体験を共有し、発見や驚きを共感する中で、友だちとの遊びが広がり、新たな気付きや喜びが生まれてきている。

エピソード3「友だちとの共感」では、ウサギの世話をする当番という共同で作業するなかで、互いの置かれた状況の認識と、相手の言葉を媒介として直接的な関係を引き起こし、互いに共有する感情として相手の気持ちに共感している。運動会の練習やバトミントンキャッチなどの遊びのなかではリズムカルな曲の繰り返しのよさ、ゲームの面白さの理解が安心して仲間入りできる雰囲気や役割の交代、協力、挑戦の面白さに共感する仲間関係の育ちが遊びを楽しんでいる。

エピソード4「課題の達成」では、水族館で見たさめを友達と協力して作り、最後まで頑張って完成させた水族館ごっこは、共通に経験した感動場面が、再現できる期待と満足感、充実感となって仲間意識を育てたものと思われる。飛行機づくりやバレードの練習では、一人の子どものイメージの実現に添って遊びが進められているが、その友だちの存在を相互に認め合いながら遊びが楽しく展開されている。遊びを提示する友だちへの憧れや、尊敬の感情が、共に課題に挑戦し、課題を達成することで仲間として認めあい、新たな仲間関係が育ってきている。

エピソード5では、誕生会でお祝いのバッチをつけてもらい、「おめでとう」「6歳だね」と成長した喜びを共に喜んでくれる友達に親しみを感じあい、きれいに飾られた場が自分のために作られている嬉しさが、共に喜び合える気持ちの良さ、存在感となっている。

幼児の感動表現による人との関わりは、喜び、嬉しさ、驚き、尊敬、達成感などの感動の表れの五感による共感である。共感 (empathy) とは他者の情緒を弁別・理解し、同じ情緒の経験をするという心の働きであり、莊巖は「幼児が他者の感じている感情状態そのものに対して共感行動が見いだされるのは、2～3歳にかけてこの段階

に達し、他人は自分と異なった感情状態にあるのだということが理解でき、他者の感情状態により積極的な関わりを示すようになる。言語能力が増加するにつれて共感情もより複雑な様相を見せ始める」8)と示すように、幼児の感動による共感、時には独り言であったり、伝えたい相手を選んだりして、友達の感じている状態に共感したり、相手は、自分と異なった状態にあることも理解できるようになり、積極的にかかわっていく姿も見られた。ここでは、表現の方法に記されている感動の表われが、応えてくれる友達にどのように伝わっているか、さらにそれが、次の感動を呼び覚まし、新たな感動を誘いだしているかを探った。その結果、5つのカテゴリーで、それぞれかわりの様子がみられた。それを集約すると、全体として、幼児の興味や関心による感動表現が、相手の共感を誘い、さらに仲間意識に支えられて遊びに発展し、友達関係が育っていることを観察を通して知ることができた。

このことは、布施「共感的な遊び」9)においても共感、「向社会的行動」を支える重要な基礎の一つとされている。

第Ⅲ章 保育者の感動表現の捉え

1. 目的と方法

本調査で作成したアンケートに、幼児のどのような姿からそれを捉えたかを知るために、(声・表情・身振り・しぐさ)を加えた。保育者の感動表現の捉えを明らかにするため得られた276名のアンケートの回答に基づき因子分析(主成分分解・プロマックス回転)を行い、保育者の感動表現の捉え方を分析した。相関行列の主対角要素に1.00を用いて、主軸法によって因子を抽出した後に、プロマックス法によって、因子軸の回転を行った。はじめ、固有値1以上の因子を抽出した結果、13因子が抽出されたが、解釈が困難であり4因子構造が妥当と判断した。

2. 保育者の感動表現の捉え

幼稚園は環境による教育である。環境とは、人的環境、物的環境、自然環境など、幼児を取り巻く全ての身近な環境を通して行われる。保育の現場では、幼児と保育者が常にかかわりあいながら幼児の発見や気づきを共有しているといえる。特に、自然とのかかわりは、どのような場面で、どのような姿から捉えられているか、保育者の感性が問われる場面でもある。そこで、保育者によって、どのような場面で、どのように捉えられているかを明らかにするために、幼児の声や表情、身振り、しぐさを通して幼児の感動場面を捉えた。以下、その結果を次の表に示した。

〈保育者の感動表現の捉え〉

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
〈第1因子 13項目〉				
28 作品をほめられたとき	.818	2.466E-02	-4.568E-02	-.124
31 好きな曲を聞いて、思わず体が動く	.645	-.150	9.337E-02	2.626E-02
29 頑張ったことをほめてもらった	.618	8.487E-02	-.168	1.886E-02
44 頑張ってやり逃げたり、応援したり	.560	-7.803E-02	-.119	.196
27 発表会や歌など思い通りできた喜び	.534	2.064E-02	.112	-7.997E-02
7 遠足やお弁当など普段と違う工夫に	.533	-.179	-6.908E-03	.261
39 絵本や童話を聞いて	.523	-9.179E-02	.131	.123
32 人形劇や紙芝居を見て	.470	9.720E-02	7.071E-02	-5.883E-02
30 自分の行為が相手に伝わったとき	.450	.145	.278	-7.659E-02
24 自然物を使って工夫したとき	.448	.289	-4.907E-02	-3.337E-02
25 友達や先生に祝って貰う	.399	-.142	.140	.241
45 楽しみにしていた行事や遠足に参加	.393	-2.599E-02	.367	-.114
26 泥団子への工夫	.373	.232	-.168	.219
〈第2因子 10項目〉				
19 ダンゴムシや虫の卵	8.909E-02	.646	-.215	-1.687E-02
16 アリやザリガニの脱皮をみて	.122	.554	-8.443E-02	1.488E-02
6 ザリガニや魚に触れたる抱いたり	-4.166E-02	.525	7.682E-03	9.214E-02
18 植物の生態に触れて	-.154	.457	.138	.272
21 昆虫を飼育した幼虫を見て	-7.532E-02	.436	.209	4.873E-02
3 実のなるモノや葉っぱの色づき	-.120	.425	.109	.209
15 雪が積もる、水たまりなど不思議	.211	.417	-.151	.154
13 水の冷たさ、どろのぬるぬる	.207	.399	-4.597E-02	-6.878E-02
14 葉っぱの色が変わる等変化	-.150	.368	.291	.228
22 ゆきだるまや自然での遊び	-5.054E-02	.322	6.449E-03	.141
〈第3因子 9項目〉				
44 頑張ってやり逃げる	-4.853E-02	2.582E-02	.725	-1.497E-02
35 最後まで頑張って取り組んだ	-1.452E-02	-.112	.718	.144
40 友達がかしてくれた	.126	-5.505E-02	.669	4.745E-02
43 できるようになったこと	-2.004E-02	-6.423E-03	.621	-8.746E-02
34 友達の絵や作品を見て感動	8.782E-02	-1.042E-02	.540	3.892E-02
36 友達の親切	.326	-.207	.470	.176
41 友達がそばにしてくれる	.175	2.074E-03	.431	.167
25 鉄棒や縄跳びに挑戦してできた	-6.136E-02	.407	.408	-.186
38 面白い発想に共感	.272	.216	.306	-4.781E-02
〈第4因子 8項目〉				
7 夕日や星空など自然の大きさに	2.388E-02	6.808E-02	8.887E-02	.608
10 空の月や星を見て	-6.895E-02	-1.225E-02	.120	.604
48 父親と竹とんぼ	.173	-9.065E-02	5.819E-03	.511
5 小動物の動きをやし	.218	.129	-.243	.495
11 小鳥の声や風の音	5.264E-02	8.704E-02	6.749E-02	.489
23 自然物の利用	-7.262E-03	9.025E-02	4.610E-02	.462
17 木の実や花の蜜	-.164	.254	.143	.421
4 小動物との出会い	8.145E-03	.294	-.137	.375

(4因子抽出後、因子負荷が.30以下は削除)

3. 結果の考察

第1因子は、幼児と保育者が、共に活動する機会や、幼児が感じたこと、考えたことを表現する機会を直接感じ取ることのできる関係から、「他者からの賞賛による自己実現」と命名した。幼児は、作品や歌などに共感したり演じたりして自己を表現し、思いが相手に伝わったり、褒められたりしたことで、喜びや充実感を味わう。このような自発性から自己を実現しようとする姿を感動している姿と捉えている。このことは、豊かな自然や文化に触れて、感じたこと、考えたことを、音や造形、動き、などで、素直に表現できる時間や雰囲気、絵本や物などの文化的環境が大切と捉えている保育者が多いと思われる。

第2因子は、幼児は、アリやダンゴムシ、様々な昆虫が卵から孵化したり、成長していく姿に驚き、発見し、気づくなど、生き物に触れて感動している。また、身近な花や実の変化など、自然の営みに心を動かし、自然の不思議さや変化、生命の大切さに気づく姿に感動と捉えていることから、「自然との共生」と命名した。このことは、直接触れることのできる豊かな自然環境が身近になければならない。特に、生命を育む小動物や、草花、樹木、とのかかわりは、生命の不思議さや息吹きを実感する。また、身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、集中してかかわることのできる静かな営みの時間も環境として、大切な条件と言える。

第3因子は、幼児は、友達の中で、他者の優しさや励ましを嬉しく感じ、他者と共に取り組んで完成させたことなど、友達との共栄による感動である。自分から頑張ったり取り組んだり、挑戦したりしたことが、友達の賞賛や、共感を呼び、また、グループの皆とやり遂げた喜びなども感動として捉えていることから、「他者との共栄」と命名した。幼児は、仲間とかかわりながら感動に裏打ちされたイメージの伝え合いをとおして仲間とかかわる力を培い、仲間へのかかわりの意識を豊かにし、自らの感性を培っていく。したがって、同年代の仲間と共に共同で遊び、共に発見や気づきを大切にする環境や援助が大切と思われる。

第4因子は、幼児は、父や母、保育者などと共に心を動かした体験をいつまでも心に暖めているものである。夕焼けの空、大きな月や星、時には、絵本から思いをめぐらし感動に浸る。自然の中で鳥の声を聞き、自然物を探した体験、さらには自然物で遊んだ思い出は、何時までも感動体験と捉えていることから、「大自然への憧れ」と命名した。幼児は、石や砂、草花や木の実などの自然物を使って遊びに活かすことは、物の性質や数量に対する感覚を豊かにする。また、自分の興味や関心に即して、自らを対象に一本化し、対象の目でまわりをイメージ化して捉え、そこで思いを全身で表現し、その事によってイメージを広げ、表現を豊かにすることを楽しみ、創造性を豊かにしていく。

学生が、幼い頃に感動した出来事として、心に残っている感動体験は、第一に自然環境とのかかわりであったのに対して、保育者は、文化的環境、つまり、日常生活のなかで、美しいもの、優れたもの、心に残るような出来事が大切であると感じていることが明らかになった。幼児が身近な環境に関心を持ち、一人で、または友達と、草や木々、そこに群がる小鳥のさえずりや昆虫の動きを発見したときの感動、友達と共同で表現したり、作り上げたりした感動を保育者が共有することは、幼児の心に嬉しさや、知的好奇心が芽生える。やがて、生命ある環境との共生の姿や生きる力の基礎となる心情・意欲・態度が身に付くと共に、思考力の芽生えなど、知識、技能獲得への意欲を育てるものと考えた。したがって、豊かな感性は、日常生活の中で得た感動を他の友だちや保育者と共有し、様々に表現することによって培われていく。

Ⅳ まとめと今後の課題

1. 感動体験のとらえ

学生が捉えた幼児期の回想性をもって感動体験尺度を作成し、幼児期の感動体験には、①「小動物との出会い」②「自然の不思議さへの気づき」で、自然とのかかわりが感動体験として深く心に残っており、③「友達との共感」④「課題の達成」⑤美しい物への憧れ」といった感動体験が明らかになった。(第1章)。この尺度を用いて感動表現のカテゴリーを実証するために、幼児のものとの出会いや遊びの姿、友達との関係について観察し、人とかかわりの中でどのように感動の伝えあいが行われているかを観察した。その結果、幼児は、感動場面の5つのカテゴリーのなかで、幼児の興味や関心による感動表現が、相手の共感を誘い、仲間意識に支えられて遊びに発展し、友達関係の育ちが確認された。(第2章)。学生の感動体験をもとに、保育者が幼児の感動をどのように捉えているかを明らかにすることによって、感性を育てるための指導を考えた。その結果、①「他者からの賞賛による自己実現」では、幼稚園においては、文化的環境の中での表現活動が大切と捉えていること、さらに、②「自然との共生」③「他者との共栄」④「大自然へのあこがれ」であった。(第3章)

2. 豊かな感性を育む指導

幼児にとって保育者は、感動を共有し、共感してくれる仲間であり、自己実現への援助者である。最近では、虫が汚い、気持ちが悪い等、実体験のない保育者も見られる。幼児期は、知る力よりも感じる力が強い時期でもある。幼児と共に考えたり、工夫したり、幼児一人では普段気づくことのできない自然現象など、保育者と幼児の感動の共有が幼児の感性を増幅させるものであることが、保育者の感動の捉えによって確認できた。

豊かな感性を育む指導とは、

- 感じたことや考えたことが表現できる環境
 - ① 生命あるものとの出会いやかかわりの体験が得られる環境
 - ② 仲間と共に共感し、共同する喜びを体験できる環境
 - ③ 自然との出会いが豊かで可能となる環境
 - ④ 興味や関心をもって遊ぶ中で、友だちと試したり、工夫したりし、周囲の環境に対する新たな気づきや、新しい考えが生まれるような環境
- 幼児の感動に共感できる保育者の存在
 - ① 子どもの心の動きを瞬時に受け止められる保育者
 - ② 子どもの感動と表現に共感できる保育者
 - ③ 環境を用意し、感動を伝え合う媒介者となれる保育者
 - ④ 子どもの自発活動が保障できる環境を構成する保育者
- 体験の関連性を見だし、経験を広げる指導
 - ① 心動く感動体験を、次の体験に生かし、多様な体験の関連性を図る指導
 - ② 幼稚園の教育がその後の教育の基盤を培う教育内容の連携をふまえた指導等であると考え。

3. 今後の課題

感性とは、自然・もの・人とのかかわりの中で育つことが実証された。そのためには、感動体験が基になっていることも明らかになった。本研究では、感動を快感情を伴う心の動きに限定して定義づけたが、事例（ウサギのうんち）に見られように、当番の役割場面では、くさい・汚いなど、決して快感情と捉えることは困難とも思える場面もある。しかし、幼児は、そのうんちの大きさを比べたり、生き物の生態や、仲間と協同の作業をすることにより、動物をより理解したり、発見や気づきによって、更に動物を身近に感じている。これは、「みんなで協同してやりとげた」という、達成感や自己効力感と共に仲間としての関わり大切さを学び取っている。このことは、「もの」や「こと」に感じて心が動き表現する、つまり、感動に伴う感性の表れと捉えた。今後は、感性のもととなる感情や感受性について幼児の行動から、探っていきたい。

[主な引用・参考文献]

- ① 戸梶亜紀彦「感動に関する基礎的研究（6）」日本発達心理学会第12回大会発表論文集（2001）236
- ② 早坂泰次郎「感動の心理学」青年心理、『29, 6 - 15』（1981）
- ③ A. アドラー「人間知の心理学」（1927）pp319 - 321 春秋社
- ④ 戸梶亜紀彦「感動に関する基礎的研究（3）」日本発達心理学会第10回大会発表論文集（1999）170
- ⑤ 島中徳子・赤井美智子・吉川晴美・日吉佳代子・宮下美智代・春原由紀「人間関係」（1996）p28 不味堂
- ⑥ 辰巳敏夫・永井千恵子・西沢幸子・渡辺真一「人間関係」（1990）pp 3 - 8 同文書院
- ⑦ 松村康平「発達と接在共存」『幼児の集団指導』（1979）日本肢体不自由児協会
- ⑧ 莊巖舜哉「文化と感情の心理生態学」（1996）p129 金子書房
- ⑨ 布施佐代子「3歳未満児保育における保育者と子どもの共感的な遊びについての一考察」保育学研究 第33巻第1号（1995）p52
- ⑩ 小倉丈佳・橋本巖「感動経験による自己理解の変化と自己成長」（Vol. 40, 89 - 98）
- ⑪ 速水敏彦・陳恵貞「動機づけ機能としての自伝的記憶」- 感動体験の分析から - 名古屋大学博士課程研究 Vol. 40, 99 - 125（1993）
- ⑫ 波多野完治「子どもの認識と感情」（1975）岩波新書
- ⑬ 村山久美子「自由記述に現れた対人認知の発達の研究（2）」教育心理学研究 Vol. 49, No. 6, pp303 - 309（1979）
- ⑭ 関口準「幼児の自発的な遊びにおける了解としての相互交渉の発達の考察」- クラスにおける人間関係をふまえて - 保育学研究 第33巻第1号（1995）
- ⑮ 田宮縁「事例から見る幼児期の仲間関係と自己形成」保育学研究 第38巻第1号（2000）
- ⑯ 技術教育国際フォーラム協議会「感性と独創力」日本工業大学編（2003）
- ⑰ 技術教育国際フォーラム協議会「感性と教養」日本工業大学編（2005）
- ⑱ 福田正治「豊かな感情と感受性」『教育と医学』（2010）1
- ⑲ 神長美津子 岩立京子「新幼稚園教育要領の展開」[明治図書]（2009）

Fostering Sensibility

–Impressive Experiences in Early Childhood and Teachers’ Role–

Fumiko KAKUTA

Sensibility is defined as: 1) the capacity of sensory organ to develop perception or feeling in response to external stimuli; 2) experience stimulated and controlled by sensation. Emotion and impulse affected by sensation.

In general, children attain developmental growth and cultivate rich emotion and motivation from actual daily experiences. Through the new, unusual, or enjoyable experiences, children gain the ability to sense things or matters in various occasions and learn to express their feelings. This ability to sense (sensibility) is built through a relationship with nature, materials, and people. It fosters aesthetic sensitivity and emotion and eventually becomes a big power to build an enriched life.

Especially, in early childhood, children are easily influenced by daily experiences, and they express their feelings by using the five senses. In other words, children can be deeply impressed by their daily experiences.

Children’s curiosity and inquisitiveness toward phenomena, animals, and plants around them will eventually cultivate their ability to think and raise motivation to gain knowledge and skills. This study highlights features of impressive expressions in early childhood and examines instructional strategies that foster rich sensibility.

Key words: sensibility, impressive experience, impressive expression, observational record, sympathy